

なぜ今防災わらべ唄か・・・

あんしんまちづくり 京都都市青年団

団長 吉村 裕司

京都では、江戸時代に18世紀になってから2回、19世紀に1回、大火を経験しています。

江戸時代、京都には伝統的な権威の象徴である禁裏（京都御所）と、武家支配の象徴である、京都所司代（二条城）が置かれていました。幕末まで京都は最初の頃こそ

「紫衣事件」などもありましたが、その後は政情も安定していたようです。

だが18世紀になり、宝永の大火、天明の大火と2回の大火を経験しています。

宝永の大火は1708（宝永5）年3月、油小路姉小路と言いますから、今の京都市中京区、丁度今の中京区役所・消防署合同庁舎から堀川通りを挟んで東側付近より出火2日間にわたって燃えたと言います。

天明の大火は応仁の乱以来の大火と言われており京都のわらべ唄にもなりました。

1788（天明8）年1月29日未明に、鴨川東の宮川町団栗図子の空家から出火、とありますから、今で言えば、東山区の、冬の京都観光に来た人が寄る南座や祇園の南側くらいです。

火は鴨川の西に飛び火し、全市中が燃えてしまいました。郡山藩（柳澤松平家）・淀藩（稲葉家）・亀山藩（石川家）高槻藩（永井家）・篠山藩（青山家）・膳所藩（本多家）など、近国の大名も救援に駆けつけたが手に負えなかったそうです。

消失家屋3万6000軒以上、洛中の戸数が当時4万軒ですから、9割以上が焼けた計算になります。御所の「蛤御門」の名の由来は、この時に初めて新在家門が開門したことから来ています。禁裏、二条城、奉行所も焼けて、仮庁舎で執務したそうです。

京都には「わらべ唄」と言うのがあります。唄にして教訓を残すものです。中には首をかしげるような内容の唄もありますが、京都の今に残る地理も「丸竹夷二押御池〜♪」と、唄にして丁稚が覚えやすいようにしたそうで、町衆の知恵でしょう。この天明の大火も「わらべ唄」になったそうで、歌い継がれたようです。「京焼け」と言う題です

参考資料、京都新聞稲庭記者より 1996/11/14 朝刊 24 京総合面朝刊 17 版

見出し：京のわらべ歌（16）京焼け（手まり歌）天明の大火を素材に・・・

- ◆ 手まり歌はその数の多いこと、また数え歌形式のもの、人々の暮らしや習俗、社会の出来事を物語風にうたっているものなど、内容が豊富なこと

でも、わらべ歌の横綱です。

「いやー、わたしが歌をうたうのどすか、どうしまひょ」と、取材の場でしり込みされるおばあさんでも、手まり歌だけは何か一つ思い出してくださいましたし、手まり歌は曲の長いものが多いのに、その長い長い歌がスラスラと歌い手の口から流れだしました。

「六十年も昔のことやのに、うたいだすと次から次と文句が出てきて一、不思議なもんどすなあ」と、聞いている私はむろんのこと、唄っているご本人が感心されるほどです。これは女の子が「まりつき」という遊びをどんなによくしたか、少女と手まりの深い縁（えにし）を語っています。

「京焼け」の歌は、応仁の乱につぐ大火といわれる「天明の大火」の事を歌ったものです。天明八（一七八八）年一月三十一日、二月一日と燃え続けました。

歌は二十番までありますが、「遙かに見えるは東寺の塔 こちらに見えるは門跡さん（西本願寺）」と、焼け残った建物がうたわれていたりして、この歌の内容は当時の諸記録や被災地図と一致しているそうです。この大火を「どんぐり焼け」とも呼ぶのは、団栗図子（宮川町）に住む夫婦が、けんかで火鉢をひっくり返したのが原因だからです。

（あいりす音楽院院長 高橋美智子）

※ ちなみに1864（元治元）年には、新在家門（蛤御門）で会津・薩摩と長州藩が交戦する「蛤御門の変」が起こり、新撰組も会津藩の命により出動していますが、戦火で京都の街はほぼ消失しています。

良い唄は、いつまでも残ります。ブラックな唄でも、「二条河原の落書」は、700年近く経つ今でも教科書に載っています。

昔、道徳の教科書で「稲村の火」がありました。広村と言う所の実話を参考にした話ですが、残念ながら今は教科書から消えています。私たちは唄を生きた教材にして、防災・防犯について小学生に広められたら良いなと考えています。

今年、内閣府の肝いりで「防災教育チャレンジプラン」と言う事業がスタートしました。全国から48機関が応募し、その中で20機関団体が、本年度のプラン採用されました。京都都市青年団の「防災防犯わらべ唄」は見事このプランに採用されました。京都では唯一です。今後専門家を交えて本格的に作業に入り、できれば学校教育の教材として京都の古き良き智慧を平成の世にも、京都から普及させてゆきたいと考えています